

この企画に寄せて

岩崎 稔

2011年3月11日の大震災、そして12日以後の原発人災は、わたしたちのそれまでの感受性を根本から揺るがす事態であった。これから長く続く見えない放射線とともに、原発をめぐる隠されてきた虚偽が一気に明るみに出たときのひとびとの当惑と憤激は、やがて4月になると、それ以前には予想もできないような規模での街頭での、それも自由で創意的な政治表現にも結びついていく。その展開のなかで、「素人の乱」という聞きなれない名の若者たちの集団が、決定的な役割を果たしたことをどれだけのひとが自覚しているだろう。松本哉と樋口拓朗は、その運動の中心にいた。木下ちがやと池上善彦も、旺盛な批評活動をしながら「素人の乱」に随伴し、その特性に早くから注目してきた。

「素人の乱」は、労働運動、学生運動、住民運動といった、従来の社会運動論のカテゴリーとは区別される。組織された主体による政治闘争などとして表れる目的論的な傾向はそこには微塵も存在しない。また組織性や党派性から一線を画し、自律性を重視

しながら特定 이슈をめぐる運動する市民運動や住民運動からも、そのスタイルは隔たっている。

「素人の乱」は、いわば自分たちが望む「革命後の状態」を先取りの的にそこに実現してしまおうとする、脱力的なユートピアの感受性と、その屈託のなさを特徴としているようだ。

出席者たちのウォール街占拠運動体験記として語りだされるこの討議は、気負いないものだから初めは気がつかないかもしれないが、ほとんど歴史的と言っている重要性をもっている。「素人の乱」とは何であるのか、それが2011年の過程でどのような役割を果たし、またどのように自分たちのなかでその経験を血肉化しているのかを鮮やかに示してくれている。ウォール街占拠やアラブ地域の革命にも思いを馳せつつ、反原発運動が開いた新しい経験をめぐるかれらの自問自答は、新しいのびやかな公共性論の試みであると言ってもいいかもしれない。

(いづさき みのる・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)